

19 林床処理法と野鼠防除

1 試験担当者

北海道支那野鼠研究室：樋口輔三郎、五十嵐文吉

造林研究室：豊原 洋

2 試験目的

従来のカラマツ造林に対する地拵え、下刈は野鼠防除の上から火入れ、および全刈が主体となっていた。しかし最近の労力不足、また寒害等、山火防止などの問題から、とくに拡大造林推進をおこなっている道内国有林では、これに代わるべき技術の確立が早急に望まれている現状である。したがってこれらの問題を解決するため、野鼠、造林研究室が共同で各種地拵え、下刈方法、とくに除草剤使用後の野鼠生息状態を検討するとともに毒饵のみの単一防除の効果の限界などを明らかにしたい。

3 昭和42年度の経過とえられた結果

各種の林床処理法とネズミ生息数との関係をしらべるために、各林床処理区と、その区のネズミ生息数調査のための記号放逐法用方取区を設置した。

各処理法の行なわれた日程(月、日)を記すと次のようにある。

イ、除草剤散布全刈火入区

除草剤散布(9.4)、全刈完了(9.9)、火入(10.4)

ロ、除草剤全面散布筋刈2列植区

地拵え完了(10.21)積雪のため、除草剤散布不能

ハ、除草剤散布筋刈2列植区

地拵え完了(11.1.5)積雪のため除草剤散布不能

ニ、無散布筋刈2列植区

地拵え完了(11.1.5)

ホ、除草剤散布筋刈5列植区

地拵え完了(11.7)積雪のため除草剤散布不能

ヘ、林床無処理対照区

これらの中で、イ、ロ、ハへの全刈区、筋刈2列植区、林床無処理対照区における9月のネズミ放逐調査の結果は次のようである。

	全刈区	筋刈2列植区	林床無処理対照区
ネズミ数 (0.5 ha)	2	11	19

植生調査の概要

調査方法は各処理区ごとに10プロットを任意にえらび密度(%)1/2以上、(4)1/2~1/4、(3)1/4~1/8、(2)1/8~1/20、(1)1/20以下(+)あめて少ないの表示方法によって林床植生の調査を実施するとともに平均草高もあわせて9月上旬に測定した。

結果の概要は次のとおりである。

イ、除草剤散布全刈火入区

優占種はクマイザサで、ササ型の單一群落とみなされるが、局部的にはオオブキ、ヤマドリセンマイ、オオイタドリ、などの混生したところもみられる。このようなところは、この処理区全面積の約1/10 密度を占めており、凹地および沢沿いの湿性タイプのところに出現している。クマイザサを含めた種の出現総数は約20種であり、地表植物の代表種はスゲである。

ロ、除草剤全面散布筋刈2列植区

イ処理区とまったく同様な植生構造を示しているが、クマイザサの密度の小さいところではムカゴイラクサの混生が目立っている。

ハ、無散布筋刈2列植区

優占種はクマイザサである。しかしこの区は全体の1/2 の地域でキク科の草本の出現密度が高く植生に明らかな差がみられる。そして地表植物では、フノキソウの出現がみられるのが特徴である。

ハ、除草剤散布筋刈2列植区

優占種はクマイザサであるが、この処理区は、イ、ロ、ハ区に比べて林床破壊の程度がいちぢるしく、ツル類(とくにヤマブドウ)の繁茂が多く、このようなところにはムカゴイラクサの侵入が目立っている。地表植物の代表種はスゲ、オシダである。

ホ、除草剤散布筋刈5列植区

放発的にキク科の大型草本の出現がみられるが、比較的安定したクマイザサの單一群落を示している。

4 昭和43年度の試験計画

4.2 年度積雪のため実行不可能であった除草剤散布を雪どけ後、たゞちに実行する。

年2～5回の植生推移状況とネズミ生息数推移の調査を行なう。

秋期に通常の害獣散布により駆除を実施する。